

「風観岳支石墓群の歴史的位置」を聴講しました。

—諫早市文化振興課企画 風観岳支石墓群に関する学術講演会—



講演会場の様子



野澤哲朗氏

2月23日（日）に諫早市の図書館で開催された標記講演会の模様をお伝えいたします。

聴講者はおよそ50人ほどで、事前に準備していた椅子や机では収容することができず、急遽追加するという盛況ぶりでした。市教委 OB の秀島貞康さんが会長を務める諫早史談会員を中心に、県市町の埋蔵文化財専門職員、民間発掘調査会社関係者、大学の考古学専攻生など、男女問わず幅広い世代の方々が聴講されていました。

最初に文化振興課の野澤哲朗さんが「これまでの風観岳支石墓群の発掘調査の成果について」と題して講演されました。支石墓の上石を庭石として転用するなどの遺跡破壊が問題となり、それを契機に1970（昭和45）年から調査が始まり、今日に至る経緯をお話しされました。発掘調査時に撮影されたカラースライドを映写しながらのお話でしたので臨場感があり、聴講者も見入っておられました。その後これまでの発掘調査の成果を披歴しつつ、同支石墓群の近くを通る長崎街道との有機的な整備にも言及され、今後の文化財指定へ向けて強い意欲を示されました。

筆者が興味深かったのは同支石墓群の埋葬形態が下部構造である石棺の規模などから直葬ではなく、火葬であると結論付けられたことです。この点については議論の余地があるとは思いますが、同支石墓群の特徴として重要だと感じました。

後半は元文化庁の主任調査官で、現在大阪府立弥生文化博物館の館長をさ



講演会場の様子②



禰宜田佳男氏

れている禰宜田佳男さんの「弥生時代と風観岳支石墓群」のご講演でした。

冒頭、「私は今、館長をクビになる瀬戸際にいます。」という発言が飛び出し、皆さん何事かと思われました。発言の真意は近年、学界で議論されている新たな弥生文化観から推し測って、将来、弥生時代と言う概念が無くなるのではないかという危惧が生じ、ひいては弥生文化博物館の存亡の危機＝館長クビという、言わばブラックジョークでした。

このような弥生文化あるいは弥生時代の再定義、再構築の気運を具体的に述べると、これまでの弥生時代とは「稲と鉄の文化」とされてきました。しかし、近年の研究によってその定義が崩れてきたというのです。水田耕作の普及に関しては、急速に普及したというのが定説でしたが、今では否定され、実際は伝播の速度はゆるやかで、かつ畑作とセットで伝播したことが分かってきました。鉄においても弥生時代の前半には鉄器は存在しなかったことが明らかになってきました。すなわち弥生時代には日本国内で多様な弥生文化が存在しており、単一概念では定義できなくなったわけです。そのような最新の研究状況を踏まえ、禰宜田さんは西北九州の弥生時代の特徴を明らかにすることが極めて重要であると説かれました。そのうえで長崎の研究者による西北九州の弥生時代像の解明が不可欠と訴えられたのです。このように前半は同氏の専門領域である弥生文化の最新の研究成果が紹介されました。

後半は支石墓、さらには風観岳支石墓群について熱く語られました。

まずは渡来人の問題を取り上げられました。従来、西北九州の支石墓の被葬者は縄文系の人々と考えられていましたが、最新の古代ゲノム解析法によると縄文人そのものの遺伝子をもつ人骨と、縄文人と大陸系集団が混血した人骨の双方が確認されており、「渡来系弥生人」という概念が、ここでも再考を迫られている状況を紹介されました。

さらに言語の最新研究にも触れられ、韓半島から渡来人によって古代日本語がもたらされたことに言及されました。

そして、いよいよ風観岳支石墓群の話題に入るわけですが、禰宜田さんは、

100基を超える同支石墓の数を、調査当初から日本最大と言われた正林護さんを再評価され、そのうえで大陸的な墓制であると同時に縄文的な葬送祭祀を引き継ぐという支石墓の特徴こそ、研究テーマであることを強調されました。

具体的には列島の外からの直接伝播なのか北部九州からの二次的伝播なのかという課題や、火葬なのか極度の屈葬なのかという課題があることを指摘されました。

また今後の同支石墓群のありかたとして、市民に親しまれる存在になることと、そのためには市民主導で文化財を活用することが必要であると説かれました。

レジメの最後には「西北九州の弥生文化を「発掘」してください」。というメッセージで締めくくられています。講演の中でも西北九州は、いわゆる「弥生化」が遅れたのではなく、個性的な弥生文化が展開していたことを力説されていました。我々はこのような禰宜田さんのメッセージを真摯に受けとめ、今後の弥生文化研究の指針にしなければならないと感じた次第です。

2025.2.24 文責：古門